津波（2004年スマトラ島沖地震・津波、バンダアチェ）

地震列島インドネシア

インドネシアは、地震・津波や火山噴火をはじめ、「災害のスーパーマーケット」と呼ばれるほどさまざまな災害に襲われてきた。2004年12月26日にスマトラ島沖で発生した巨大地震によって生じた大津波はインド洋沿岸諸国を襲い、死者・行方不明者は14か国で22万人以上、インドネシアだけでも17万3000人に上った。津波が街を襲う映像は報道を通じて伝えられ、世界中の人々が津波の脅威に衝撃を受けた。

地震（2006年ジャワ地震、バントゥル）

地すべり（2009年西ジャワ地震、チアンジュル）

スマトラの浜と山

世界第 6 位の面積を持つスマトラ島は、島の西側を南北に脊梁山脈が貫き、深い森に覆われている。人々は海沿いや尾根筋を通じて移動し、海岸沿いの平野部や内陸山間部の盆地に固有の生活世界が発展してきた。1970年代以降に経済開発の波が及ぶことで、浜の世界と山の世界の間の隔たりが拡大・固定化されていった。

山と浜からなるスマトラの地図（赤色部分はスマトラ島沖地震・津波で浸水した地域。UNOSAT Maps より）

上）山あいの村
中）尾根筋の道。大雨で崩れやすい。
下）海岸沿いに発達する幹線道路。2004年スマトラ島沖地震・津波では幹線道路が寸断され救援活動の障害となった。

自助・共助・公助そして外助

災害は、その社会が潜在的に抱える課題を露わにし、社会の弱い部分に大きな被害を与える。被災地では、地元の人と域外からの支援者がともに復興再建に取り組む。危機への対応は、自分で守る自助、地域社会で助け合う共助、行政を通じて対応する公助に加え、国内外の被災地以外の社会から救いの手が差し伸べられる外助が大きな役割を担う。

上）壁新聞で情報を収集する被災者（第３章を参照）
中左）災害対策本部のメディアセンターでプレスリリースを確認する支援団体スタッフ
中右）被災者と支援者を橋渡しするアチェ・ニアス復興再建庁（BRR）のメディアセンター

下）国際スタッフ、地元スタッフ、地元住民のミーティング
右）仮設住宅での水の配給

仮想地球儀の上に津波遡上高、生存者の証言、被災から現在までのアチェの様子を示す画像データ等を表現した「アチェ津波アーカイブ」（http://aceh.mapping.jp/）より

伝える知——支援・復興・防災

災害による喪失や再生は当事者にとって一回限りの経験だが、災害は繰り返し起こる。被災地と外部社会の人々がともに被災と支援・復興の経験を記録し継承することは、被災地や被災者の再生を支えるだけでなく、地域と世代を超えて人々の営みを結びつけ、次の災害への備えともなる。

復興を記録することは変化を記録することである。左は津波被災から２か月後、右は被災から２年後のバンダアチェ市街の様子

街全体を博物館に見立てるアチェ津波モバイル博物館の取り組み。モバイル端末を活用して目の前の景色に重ねて被災から復興の過程をたどれるようにする（第８章参照）。